かたりべ142

豊島区立郷土資料館・芸術文化推進グループだより

まちと文学　第一回
泡坂妻夫『春のとなり』

文学作品には、実在の場所が登場することがあります。私たち学芸員は「地域ゆかりの文学」として、区内が舞台となった作品も、調査、収集しています。

南雲堂、2006年

今回紹介する作家・泡坂妻夫（一九三三―二〇〇九）は、生まれ育った神田の家が戦災で焼かれ、一九四七（昭和二二）年に豊島区・大塚に暮らし始めます。以後亡くなるまで約六〇年以上、区内で生活しました。家業の紋章上絵師の仕事のかたわら作品を執筆し、『乱れからくり』（一九七八）で第三一回日本推理作家協会賞、『蔭桔梗』（一九九〇）では第一〇三回直木賞を受賞しました。

自伝的長編小説『春のとなり』（二〇〇六）は、一九五二年頃の神田を舞台に、自身の体験と戦後の風景を描いた作品です。物語の最後では、池袋や大塚のあたりが描かれています。特に印象的なのは、一九五四年一月二〇日に丸ノ内線池袋―御茶ノ水間が開通した日の場面です。

そして、いよいよ新しい地下鉄が開業した。

開業当日、朝から打ち上げられている祝いの花火の音に、秀夫は家の中に落ち着いていられなくなり、昼過ぎに家を出た。

山手線の池袋駅に降りると、地下鉄見物の人で押すな押すなの混雑である。

好天にも恵まれて、空からは花火に仕込まれていた落下傘が舞い降りてくる。駅のあちらこちらには祝いの字が書かれた幕が張り巡らされている。

丸ノ内線は、東京では銀座線に次いで二番目に開通した戦後初の地下鉄でした。開通当日は、『新地下鉄誕生』というパンフレットが制作され、池袋では作品に書かれているように花火やアドバルーンをあげて祝ったといいます。戦後の復興へと向かう雰囲気がうかがえます。

泡坂は帯文（裏）で、『春のとなり』というタイトルと作品創作について次のように書いています。

かつて日本には／長い冬の時代があった。

昭和十六年にはじまった／太平洋戦争は、／二〇年に敗戦、／そしてしばらくは／敗戦後の混乱期となった。

昭和二七年、講和条約が発効し、／日本の独立が回復して、／ようやく冬の終わりの気配が感じられはじめた。（中略）あの、春のとなりの時代、／春の胎動をぜひ書いておきたい。

今でないと遅くなってしまうと、思い立ったのである。

どんなに時代が変わっても、春を感じ、待ち遠しく思う気持ちは変わらないのかもしれません。時に作家の言葉は、私たちが経験していない時代の空気や雰囲気を伝え、体感させてくれます。

なかなか落ち着かない今の時代が、冬に逆戻りするのではなく、「春のとなり」でありますように。

【参考文献】『文藝別冊　泡坂妻夫』河出書房新社、二〇一五年／『写真で見る豊島区50年のあゆみ』豊島区、一九八二年／『東京メトロ建設と開業の歴史』実業之日本社、二〇一四年

（文学・マンガ　西方ゆり恵）

文学・マンガ分野 ゆかり作家の横顔 第一回

マンガ家・佐川美代太郎（さがわみよたろう）

文学・マンガ分野では、調査研究の一環として、ゆかりの作家本人やそのご家族、関係の深かった方々へのインタビューを行い、映像資料を作成しています。展示などですぐにご紹介できる場合もあれば、なかなか上映の機会がないこともあるため、映像資料からインタビューの一部を抜粋し、掲載することとしました。

ご家族や関係者へのインタビューからは、作品や業績だけではなく、作家本人の人となりを垣間見ることができます。そんな、作家の知られざる一面を紹介する試みとして「文学・マンガ分野　ゆかり作家の横顔」というシリーズを企画しました。

第一回目は、マンガ家・佐川美代太郎（一九二三-二〇〇九）のご長女・小林美菜子氏のインタビューをご紹介します。佐川は新聞の投稿漫画欄でデビューし、その後中国の歴史や思想、仏教などを題材とした作品を多く残しました。マンガのみならず、絵本や大型の屏風絵など、さまざまなジャンルに挑戦し続けました。

―茨城県出身の佐川が、豊島区に越してきたきっかけを教えてください。

父（佐川）のおじが、池袋駅の西口に大きな桑畑を持っていまして、そこの管理人を頼まれて実弟と二人で豊島区に住むようになったと聞いています

―その後、雑司が谷に移られますが、いつごろからお住まいだったのでしょうか。

はっきりとは分からないのですが、昭和二四（一九四九）年後半か、二五年のはじめと聞いています。大学を出て就職をして、新聞の投稿漫画欄へ投稿もしていました。千葉県松戸市に住んでいたのですが、新聞記者の方から東京に出てくるよう強く勧められて、母（佐川の妻）の実家がいくつか家作を持っていたので、そこに住み始めたと聞いています。

―小林さんにとって、印象にのこっている作品はありますか。

屏風の《菩提楽（ぼだいらく）》です。菩提とは、悟りを開いた境地ということらしいのですが、その境地を大きな裸婦四枚で表し、あとは蓮の花だけ。どうして裸婦なのか、なぜ蓮の花なのか。聞いても答えてくれないのはわかっていましたから、聞きませんでした。想像ですが身を飾る必要がない、ということかな、と。蓮は仏教を象徴する花として扱われますから、裸婦と蓮で、心の安寧（あんねい）をあらわしたかったのかなと思いました。想像だけで、実際のところは分かりません。ただ、それを白と黒で表して、まだ若かった私は、衝撃を受けました。

《菩提楽》制作中の佐川　写真提供：小林美菜子氏

後年、私がとても良いと言ったせいか《菩提楽》に色を付けたのですが、それを私は見向きもしなかったので（父は）怒っていました。

―小林さんから見て、佐川美代太郎とはどんな人物でしたか。

父としては面倒で厄介な人でした。勘が鋭くて、嘘が通じない。かと思うと、まあどうでもいいや、みたいな投げやりなところもあって、一つの物差しでは測れない人でした。マンガ家としては魅力的な人だったかもしれません。自分が気になることは納得できるまで手を緩めず追及する、そこに美意識も批評精神もユーモアも詰まっている。自分の感じたことをどんな絵にするか、その過程が一番きつかったらしく、その時は厳しかったですね。どんな絵にするか決まった後は、ほんとうに楽しそうでした。上機嫌で一気呵成（いっきかせい）に作り上げました。

※佐川美代太郎の生涯については、『かたりべ』一二〇号（二〇一六年七月八日発行）、作品については一三八号（二〇二〇年九月二五日発行）をご参照ください。

（文学・マンガ　佐伯百々子）

色付けされた《菩提楽》写真提供：小林美菜子氏

近々レポート

池袋モンパルナス巡回

池袋モンパルナス、豊島区で活動をする私たちにとっては耳になじんだこの言葉も、区内から外に出ればほとんど通用しないことは、二〇二一年度の「池袋モンパルナス展—画家たちの交差点」でよくわかりました。これは、茨城県筑西市（しもだて美術館）、愛知県瀬戸市（瀬戸市美術館）、山形県酒田市（酒田市美術館）を巡回した展覧会です[右図・ちらし]。この三館の館員の皆さんは、池袋モンパルナス、を聞いたことがなかったそうです。

池袋駅の西側を中心に、主に一九三〇年代から四〇年代にかけて多くの芸術家たちが集い制作し芸術論を闘わせ交流した空間と雰囲気を、詩人で画家の小熊秀雄がパリのモンパルナスになぞらえて、池袋モンパルナスと呼びました。ここにはアトリエ付き借家が建てられており、それらが集まったものをアトリエ村と言います。そこに暮らしたのは、多くが芸術を志す地方出身の学生たちでした。

この展覧会は、一般財団法人地域創造の令和二・三年度市町村立美術館活性化事業 第二一回共同巡回展でした。文字通り、市町村立美術館を活性化させようというこの展覧会は、まず地域創造が展覧会の大枠を定め、その展覧会を実施したいとした美術館の中から開催館を決定、二年のうちに準備を整え展覧会を開催するというものです。これに豊島区は、板橋区立美術館とともに所蔵品を貸し出し、一緒に展覧会を作り上げていくアドバイザーの立場で参加させていただきました。具体的にはカタログの作成に参加、寄稿したほか、展示の立ち合い、ギャラリートークなどを行いました。

同展は、板橋区立美術館と豊島区の所蔵作品あわせて八六点に映像作品三点、それに加えて開催館それぞれの池袋モンパルナスに関連する所蔵作品が展示されるという構成です。森田茂（しもだて美）、北川民次（瀬戸市美）、斎藤長三・今井繁三郎（酒田市美）[下図・右]らの作品が加わったとても刺激的な展示となりました。開催館にとって、それらは地元の人々に長く親しまれてきた身近な作家による作品です。その作品が池袋モンパルナスの文脈で展示されたことは、地元の人々にとっては逆に新鮮だったそうです。私たちにとっての今回展の収穫は、展示する機会があまり多くない豊島区の作品を、たくさんの方々に見ていただけたことがひとつ。もうひとつは各地域で親しまれている作品が池袋モンパルナスの文脈の中に置かれたことで、池袋モンパルナスがより豊かなひろがりを持てるとわかったことです。所蔵作品だけを展示していては、体感することのできないひろがりでした。

展覧会が分担しながら組み上げられていく際に私たちに求められたのは、作家の生きた当時と現在の住所表記で、地図上ではどこなのか、ということでした。郷土資料館の助けを得ながら、長崎地域の表記と場所については何カ所も確認しました。こうした作業は、自分たちにこれまで不足していた部分を再認識する機会にもなりました。なお、本展で作成された長崎アトリエ村模型の一部をバナーにしたものは、同展終了後に譲り受け、当時のアトリエ村の中に入ってみたかのような写真撮影スポットとして早速活用させていただいています[左図・左]。

「党派を越へて斯くのごとく集る」と小熊秀雄によって言われた池袋モンパルナスがさらなる一歩を踏み出しました。

（美術　小林 未央子）

展覧会データ：三館あわせて開催期間は一三五日（うち、緊急事態宣言でしもだて美術館は三四日間閉館）。総入場者数は四三九六人。

右：池袋モンパルナスと開催館ゆかりの画家は４章の部分で、酒田市美会場の斎藤長三作品です。
左：『池袋モンパルナス展—画家たちの交差点』カタログを持ち、バナーを使ってアトリエ村にいるように撮影。

資料を守る環境管理 ―温湿度の観測―

■博物館施設の温湿度計

豊島区立郷土資料館の展示室では、部屋の隅に写真①のような機器を置いています。博物館施設ではよく見られるものですが、これは設置された場所の温湿度を記録する測器です。

仕組みは単純で、電池で円柱部をゆっくりと回転稼動させながら、円柱部に巻きつけた記録紙に、その時点の温度や湿度を指し示すペンの先を接触させておくことで、変移を記録します。自動的に記録をしていくことから自記記録計などと呼ばれます。資料を保管する展示室などでは温湿度の変化を記録し、資料に負担がないかを確認します。温湿度変化の記録を残しておくことで、資料に何らかの変化が発生した際の原因特定に役立つこともあります。

▲写真①　自記記録計

■測器のアナログとデジタル

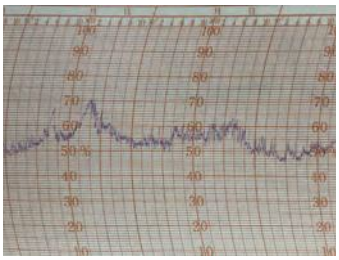
温湿度計には、大きく分けてアナログ方式とデジタル方式の二種類があります。

上記のように温湿度の変化を記録紙に記録するのはアナログ方式です。定期的に記録紙を取りかえ、計測が済んだ記録紙をファイルに綴じていくことで記録を蓄積します。溜まった記録紙がかさ張り、機器自体が大きいために設置場所を選ぶ必要があるものの、記録紙に直接記録をつけているため信頼できるなどといわれ、博物館や倉庫などで長らく使われてきました。

デジタル方式の特徴は、測器に故障や異変などがあった場合に問題箇所が分かりにくく、記録の取出しや表示・編集には対応するソフトウェアが必要になることがありますが、比較的長い期間の継続計測が可能(定期的な記録紙交換が不要)、計測結果の自動的な集計・編集が可能、概して小型であるためより資料に近い位置での環境観測が可能といったメリットがあります。当館でも、定期的に記録紙交換ができない収蔵施設の温湿度観測にはデジタル式の測器を使用します。

気を付けなければならないのは、同じ環境でもこの方式の違いによって、異なる計測結果が表れることがあるということです。例えばアナログ方式で計測した場合、写真②のように湿度だけ激しく揺れ動くことがあります。空調で温度のみを一定に設定すると、空調の稼働に合わせて湿度が上下してしまいます。

このように途切れることなく変化を記録するアナログ方式に対して、デジタル方式の測器は予め設定した時間間隔ごとの数値だけを記録するため、設定によっては細かな上下変化が記録に表現されない可能性があります。



▲写真②　記録紙(青い線が湿度を示している)

■資料環境の管理

当館の場合、なかなか理想通りにはいきませんが、資料を保管する環境では温度を二〇℃、湿度を五〇%で安定させようとすることが多いです。温度は高すぎても低すぎても、資料の劣化を早める原因になりやすく、湿度が低いと資料が乾いてひび割れが生じてしまいますし、湿度が高いとカビが発生して資料を損なってしまいます。ただし、求められる環境設定は資料の性質や状態に合わせるべきで、一概にはいえません。

温湿度のほか、展示中の文書(もんじょ)や絵画作品などは資料がどれだけ光にさらされているかを計測することもあります。

■総合的有害生物管理(Integrated Pest Management)の考え方

資料を虫や菌による被害から守るためには、定期的な燻蒸(くんじょう)を行なう方法もあります。しかし、世界的な傾向として、日常的に環境監視し、「総合的に有害生物を管理する」ことで被害を抑制する考え方が取入れられるようになってきました。そうした環境管理を怠り、資料に何らかの被害が生じてから修復する場合、完全に元通りにはなりませんし、一般にその費用も高額になるといわれます。

資料を損なう原因は様々あり、それへの対策も多岐にわたりますが、環境が与える影響には分かっていないことも多く、よかれと思っての対策が裏目に出ることもあり得ます。それでも点検機会を持つことは重要であり、問題の早期発見が資料を守ることにつながります。

(郷土　鄧　君龍)

小学校の団体見学からみえたもの

豊島区立郷土資料館では、例年区内の小学三年生が一二月頃から二月頃にかけて学ぶ「くらしのうつりかわり」の授業に合わせて、郷土資料館を見学し、実際に昔の道具を見たり、体験してもらえるような学校連携事業を行っていました。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大や飯能市の収蔵庫への資料移転作業による休館のため、二年程度小学校の団体見学の受け入れが困難な状況でした。また、コロナ禍における団体見学では、感染防止の観点から昔の道具に直接触れてもらうことが難しく、パネルやスライドを作成し、豊島区の歴史についての解説を行いました。小学三年生では歴史の授業がまだないため、団体見学全体を通して、歴史や資料に興味を持ち、考えてもらうというテーマで解説を行いました。

今と昔の写真を熱心に見比べていた(2022年2月18日撮影)

二月に行った区立朋有(ほうゆう)小学校の見学では、としま産業振興プラザ七階の郷土資料館のほか六階の第三会議室では、常設展示室と展示にはない昔の写真をつかったスライドで郷土の歴史について紹介しました。また、企画展示室で行っていた美術分野の『生誕一二〇周年　小熊秀雄遊歩者のスケッチ』の展示では、作品を鑑賞して、好きな色や描かれている人物は何をしているかなどを絵を観察し考えてもらい、意見を他の子どもと共有する対話型鑑賞を体験してもらいました。また、解説の冒頭では美術館で作品を見る際のマナーなども併せて説明しました。

ヤミ市模型を熱心に見る児童たち(2022年2月18日撮影)

芸術作品に触れる貴重な機会(2022年2月18日撮影)

筆者は六階のスライド解説を担当し、小学校付近の昔の写真と現在の写真を比較し、今と昔とどこが違うかなど、学校近辺の昔のようすから歴史そのものに対して興味を持ってもらうことを重視しました。現在のサンシャイン60は、明治時代末期には大根畑に囲まれた刑務所(巣鴨監獄)の跡地に建っていることや、約六〇年前は都電やトロリーバスが車と同じ道路を走っていたことなど、現在の光景とは異なる風景を紹介し、驚きの声が上がりました。その一方で、大塚駅前や池袋東口など、現在もまだ面影がある写真を紹介して、どこが同じでどこが違っているかみなさんに考えてもらいました。解説をしていて気がついたのが、「池袋の象徴的な建物は？」という筆者の質問に対して、子供たちから「区役所」という回答が多かったことでした。以前は「池袋といえばサンシャイン60」という回答が多く、町の発展と共に子どもたちの池袋に対するイメージも移り変わっていると感じました。

今回の団体見学を終えて、子どもたちの知らなかったことを知りたいと思う力には驚かされました。解説では積極的に発言をする一方で、解説した内容を学校が用意したワークシートにびっしりとメモを取っている子どももおり、見学を楽しんでもらえたと感じました。今後も公立学校との連携を強め、団体見学などの学校連携事業の必要性を感じました。

五月から始まる豊島区制施行九〇周年企画展でも、子どもたちに興味を持ってもらえるような内容について企画していきたいと思います。（郷土　水吉　雄人）

郷土資料館　2022（令和4）年度　豊島区制施行90周年記念事業予定

会　場	会　期	事　業
郷土資料館	2022年5月5日（木） ～8月28日（日）	**企画展「昭和の暮らしと遊び～昔の遊びを体験してみよう～」**（仮称） 和室2部屋で昭和の暮らしを再現するとともに、家電製品や昔の遊びに関する資料を展示します。メンコやコマ回しなどの体験や紙芝居の上演などもあります。
	2022年10月1日（土） ～2023年3月26日（日）	**特別展「大豊島区展～過去から学び、今日を生き、未来に希望～」**（仮称） 明治・大正から昭和・平成・令和へと大きな変貌をとげた豊島区のあゆみを、郷土、美術、文学・マンガのコレクションや新作のジオラマなどで振り返るとともに、区制100周年に向けて豊島区を展望します。
雑司が谷 旧宣教師館	2022年10月1日（土） ～2023年3月26日（日）	**連動企画「としま黎明期～豊島区90年を育てた児童文化『赤い鳥』～」**（仮称） 1918年創刊の『赤い鳥』は、童話・童謡・童画の児童文化運動の先駆けとなり、その精神は今も受け継がれています。区ゆかりの文化人のパネルや「おばあちゃんのおはなし会」の映像とともに紹介します。
鈴木信太郎 記念館	2022年10月1日（土） ～2023年3月26日（日）	**連動企画「鈴木家の暮らし×としま90年」**（仮称） 書斎や茶の間で使われていた家具や調度品などで鈴木家の昭和の暮らしを再現します。座敷棟では、信太郎の長男成文（しげぶみ）氏の日記をもとに「としまカルタ」を作成して、平成の区民の暮らしの情景を振り返ります。
（仮称）昭和歴史 文化記念館	2022年11月1日（火） ～2023年3月26日（日）	**特別企画展「タイムトリップ　豊島区の90年」**（仮称） 昭和20年代に建設された戦後マーケット「味楽百貨店」を活用した文化施設のオープンに合わせて、昔の写真やジオラマ、風景画などを展示します。

※展示替えにともなう休館のお知らせ　2022年3月14日（月）～5月4日（水）、8月29日（月）～9月30日（金）
※各会場により開館時間や休館日が異なります。また、新型コロナウイルス感染状況等により事業を変更・中止する場合があります。詳細は区ホームページ等にてお知らせいたします。

資料寄贈受入れの一時休止のおしらせ

資料移転及び展示作業のため
資料寄贈の受け入れを
2022年5月頃まで、
一時休止いたします。

11月1日は としま文化の日 Toshima City Culture Day

SDGs未来都市としま TOSHIMA International City of Arts & Culture SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
豊島区は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。

かたりべ
No.142
・
2022年3月25日
・
豊島区立郷土資料館
・
東京都豊島区西池袋2-37-4
としま産業振興プラザ7階
・
電話 03-3980-2351
URL
http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan/index.html

編集後記

「かたりべ」一四二号をお届けします。
今年は例年になく寒い日が続きましたが、ようやく春の日差しが暖かく感じられる季節となりました。昨秋からの飯能倉庫の郷土資料移転作業は二月初めに無事終了しました。
また、美術所蔵作品展「生誕二〇周年小熊秀雄　遊歩者のスケッチ」と文学・マンガ分野「収蔵資料あれこれ―版画×池袋・雑司が谷編―」展も好評のうちに終了しました。
来年度は豊島区制施行九〇周年を記念した展示と事業が目白押しです。郷土、美術、文学・マンガの三分野が連携して、豊島区のコレクションを一堂に紹介する、楽しい、ユニークな展示となるよう、職員一同頑張ってまいります。
どうぞご期待ください。（郷土　横山恵美）